

「手話」という言葉で、心を通わせる

～ 知っておきたい「ろう者」の真実～



はじめに～「耳が遠い」と「ろう者」の違い～

介護現場での「聞こえにくさ」には**2**種類ある

1.老人性難聴：声を大きく、ゆっくり話せば通じる

2.ろう者（手話話者）：日本語とは別の「母語」を持つ



「目で見ると」ろう者の感覚と、安心のための配慮

1. 視覚の不透明さ = 不安

- ・ ひそひそ話：内容不明 → 「悪口？」と疑念を生む
- ・ 乱暴な動作：強い振動や動き → 「怒り」と誤解される

2. 接触前の「見える」納得

- ・ 急な接触：背後からは厳禁（強い恐怖心）
- ・ 処置の合意：着替えや手当ては「まず説明」から

3. コミュニケーションの壁

- ・ マスクの壁：口元が隠れると情報が遮断される
- ・ 共通の不安：手話がわからない「聞こえる人」と同じ疎外感

手話は単なる「身振り」ではありません



法律での定義：

2011年「障害者基本法」：手話は「言語」とであると初めて明記。

2025年「手話言語施策推進法」：手話を使いやすい環境を整えることが、国・自治体の「法的義務」となりました。

言語としての特徴：

独自の語彙、文法、語順、歴史を持っている。

日本語を「手指でなぞるもの」ではなく、全く別の体系を持つ言葉。

脳の反応：

手話を使っている時、脳の「言語中枢」が活発に動いている。

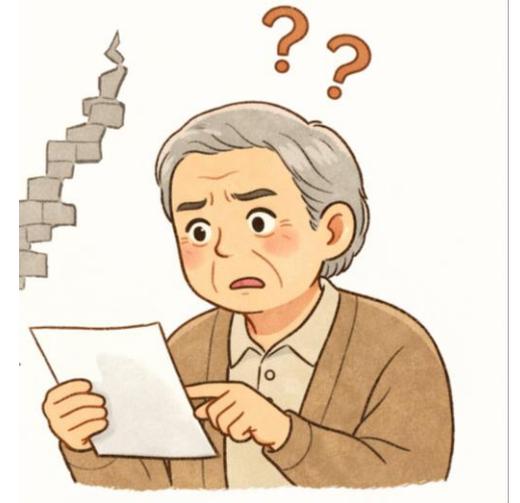
脳にとって、手話は音声言語（日本語）と同じ「言葉」として処理されている。

表情は「感情」ではなく「文法」です

| 項目 | 日本語（音声言語） | 日本手話（視覚言語） |
|-----------|------------------|--------------------------|
| 情報の入り口 | 耳（聴覚） | 目（視覚） |
| 語順の基本 | 主語 + 目的語 + 述語 | 主語 + 目的語 + 述語（+表情） |
| 文法の要（かなめ） | 助詞（は、が、に、を、も） | NM 動作（眉・目・顎・体の動き） |
| 「ない」の否定表現 | 文末に「～ない」という言葉を足す | 首を横に振る（動作を被せる） |
| 「？」の疑問表現 | 文末の音を上げる・「か」を足す | 眉を上げる・相手を注視する |
| 伝える速度 | 音声を順番に並べて伝える | 手と表情で複数の情報を同時に伝える |

日本語と手話は「別の国の言葉」

ろう者の感覚：手話は「母語（第**1**言語）」
日本語は「外国語（第**2**言語）」



音の壁：「助詞（は・が・に・を）」は音の響きで覚えるもの。
音が入らない環境で文章を完璧に理解するのは
非常に高度な学習が必要

問 題

Q1. 手話は世界共通のコミュニケーション手段である？

A: はい（世界中でほぼ同じ）

B: いいえ（国ごとに全く違う）

正解： **B**（国ごとに全く違う）

日本には「日本手話」、アメリカには「アメリカ手話」があります。

日本語と英語が違うように、文法も単語も異なります。

【ポイント】： 手話は単なる身振りではなく、
それぞれの国で育まれた「独自の文化と言語」です。

問 題

Q2. ろう者にとって、日本語の「筆談」はどのような感覚に近い？

A： 私たちが「日本語のメモ」を読むのと同じ感覚

B： 私たちが「英語や漢文の読み書き」をするような感覚

正解： **B**（英語や漢文の読み書きをするような感覚）

手話を母語とする方にとって、日本語は「後から学んだ第**2**言（外国語）」に近い存在です。

文字は読めても、助詞の細かいニュアンスを掴むには多大な労力を要します。

【ポイント】： 「書いてあるから伝わっているはず」という思い込みは、相手に**大きな負担**を強いている可能性があります。

問 題

Q3. 1990年代頃まで、多くのろう学校で
「手話」はどう扱われていた？

A：積極的に推奨されていた

B：使用を禁止されていた

正解： **B**（使用を禁止されていた）

口の形を読み取らせる「口話（こうわ）教育」が絶対とされ、手話を使うと叱られる時代が長く続きました。

今の高齢の利用者様の中には、自分の言葉を否定されてきた心の傷を持つ方が多くいらっしゃいます。

施設で手話を認めることは、その方の「奪われていた尊厳」を取り戻すことなのです。

かつて手話は「禁止」されていた

口話教育の時代： **1990**年代まで、学校で手話を禁じ、
口の形を読み取らせる教育が主流だった

失われたもの： 自分の本当の気持ちを
自分の得意な言葉（手話）で表現する権利

背景： 手話は「福祉」の対象であっても
「言語」としては認められていなかった。



筆談は「情報」を運び、手話は「心」を運ぶ

筆談のデメリット：

- 1.事務的で冷たい印象になりがち
- 2.細かい感情（ズキズキ、不安、寂しさ）が削ぎ落とされる
- 3.相手に「外国語での読み書き」という負担を強いる

手話の力：表情と手の動きで、
その人の「人柄（声）」がそのまま伝わる

「自分の言葉」で笑える施設にするために

視覚の確保：

相手の目を見る、マスクを外す、明るい場所で話す

筆談の捉え方：

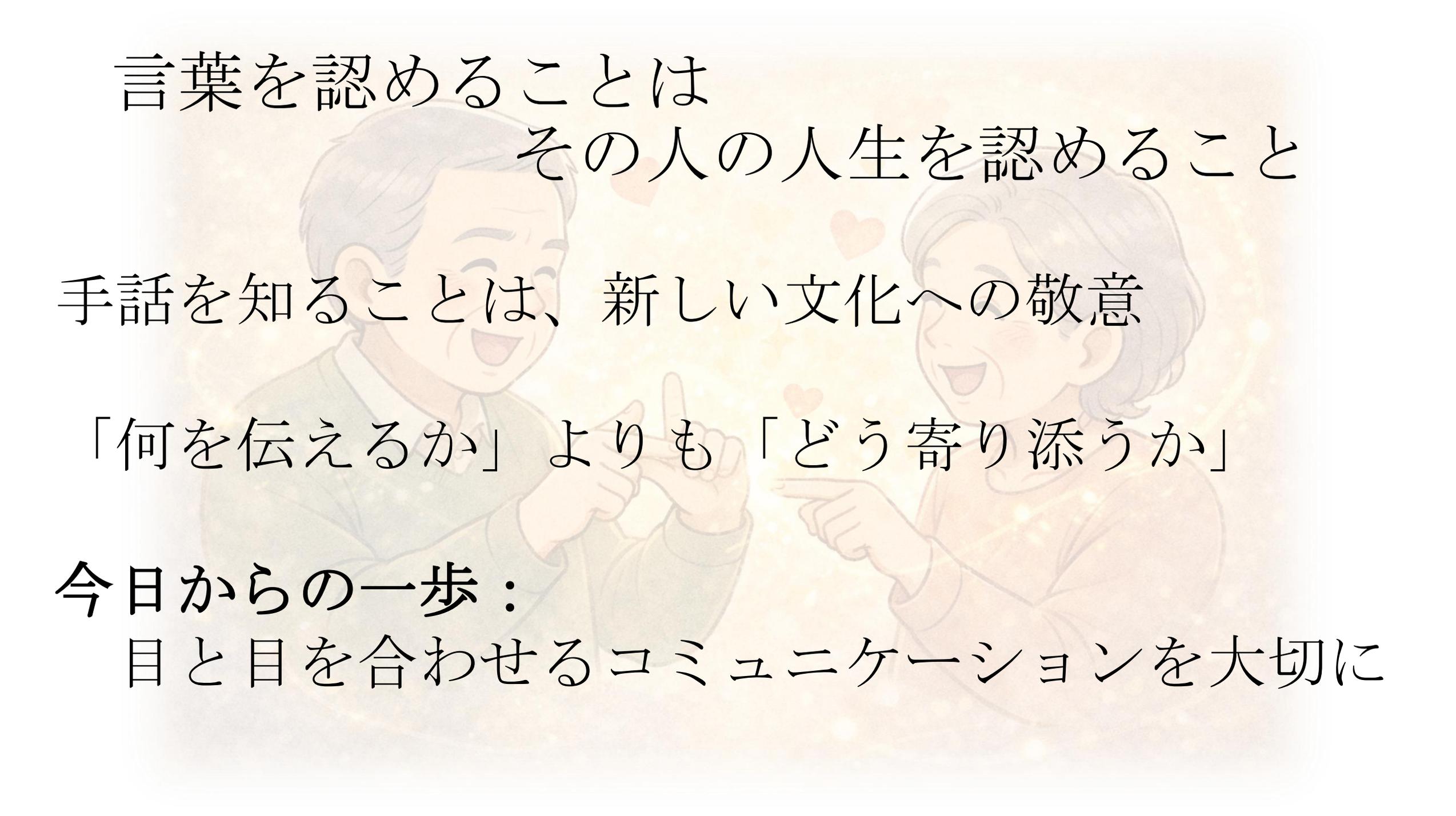
「筆談で十分」と思わず、あくまで補助手段と考える

心の尊重：

「おはよう」「ありがとう」だけでも手話で伝える

結 論：

手話を「言語」として尊重すれば、ケアの質が変わる



言葉を認めることは
その人の人生を認めること

手話を知ることは、新しい文化への敬意

「何を伝えるか」よりも「どう寄り添うか」

今日からの一歩：

目と目を合わせるコミュニケーションを大切に